

滑稽俳句修業 (一)

東 良子

滑稽句は、伝統俳句からすれば邪道とされて、未だにあらゆる俳句雑誌の巻頭を飾ることはない。したがって「滑稽俳句の作り方」を書いた本は何処にもない。テキストがあるとすれば滑稽俳句協会の八木健会長が無料配布している「八木健の滑稽俳句術」ぐらいなものである。

私の本論も、八木健会長の「滑稽俳句術」を参考書として執筆した。滑稽俳句協会報二〇一〇年(平成二十二年)十二月号、NO二七以降の自身の作品を素材に、滑稽俳句の作法を「五つの扉」としてまとめてみた。滑稽俳句修業の途上報告としてお読みいただきたい。

◆擬人化が滑稽句の「一の扉」

正客のために乱れて萩の花

良子

乱れ萩の美しさを描いた。正客はお茶会の最上位の賓客である。活けられた萩を「乱れ萩」にしてもてなすという茶会の亭主の心配りであるが、ここは萩の花が自主的に乱れて見せたとした。萩の花まで正客の接待に気を使うという可笑しさを分かっていただけだろうか。擬人化で滑稽句をと提案されている八木会長の提案にかなり忠実な一句である。

◆正直な心が「二の扉」

河豚の白子たらふく食べて身籠らず

良子

河豚の白子は毒(テトロドトキシン)の含有料が少ないので美食家にもてはやされている。最近は若い女性が美肌によろしいと食することが多い。白子は精子だから食べたら妊娠するかも知れない。この句はそんな心配をすることの可笑しさを描いた。

女性であればこそ、一瞬の心配の次の安堵であるが、作者の性別を見て句の解釈が成立する一句であ

る。八木健の滑稽俳句術では「正直が可笑しい」に分類される一句。

初学の頃、月刊誌「俳壇」の「微苦笑俳壇」欄の選後余録に、八木健会長が「滑稽句の題材は身の周りを見つける」と書かれていて、私も身の周りを眺めては滑稽句の題材を拾った。

◆滑稽目線で捉えるが「三の扉」

我よりも丈高き子へお年玉

良子

お年玉は子どもを見降ろして与えるのが普通だが、身長が親を追い越すと句のような情景となる。その時にちょっと可笑しいぞと思う。ありふれた光景で可笑しいとも言えぬという方もあるだろうが、私はこれぞ滑稽と思ったのである。滑稽句というものは読者により「可笑しい」の度合いが異なるわけで、総ての読者がこれは滑稽だと笑ってくれるような句は滅多にできるものではない。

ごく当たり前を滑稽目線で捉えると題材はいくらでもあるという、八木会長が微苦笑俳壇に書かれていたことが納得できる一句である。

◆反対側から見るが「四の扉」

一等賞無き運動会の不公平

良子

時事俳句である。最近は何んでも公平にということで、運動会に一等賞がないらしい。競争社会で最も民主的な徒競争で順位をつけないのは滑稽である。学業は一等が東大である。これを公平にするためには「阿弥陀籤」で決めるのがいいとでも言うのか。一等からビリまでの順位をつけてこそその公平である。私を感じた滑稽は世の中にゴロゴロしている本末転倒である。

◆推敲を重ねて完成へが「五の扉」

春眠や狸寝入りの人が居る

良子

春眠と狸寝入りの関係が近くて滑稽に成り切れなかった句である。狸寝入りそのものが滑稽であるから、本当に眠い人と狸寝入りの人の区別がつきにくいところに滑稽がある。「春眠の狸寝入りが爆睡に」とすれば滑稽になるのではと思う。

滑稽は幅広い。滑稽句をつくる秘訣は滑稽を発見する眼力ではないか、そんな

気がしている。